



TITLE:

依存のあり方を通してみた青年期の友人関係：自己の安定性との関連から

AUTHOR(S):

久米, 禎子

CITATION:

久米, 禎子. 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係：自己の安定性との関連から. 京都大学大学院教育学研究科紀要 2001, 47: 488-499

ISSUE DATE:

2001-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/57388>

RIGHT:

依存のあり方を通してみた青年期の友人関係

—— 自己の安定性との関連から ——

久 米 禎 子

Study on Friendship in Adolescence

from the View Point of Dependency

KUME Teiko

問 題

1. 青年期における自己と友人

青年期は、性的成熟にともなう急速なからだの成長や認識能力の発達、周囲からのおとなになることへの要求などによって、内なる世界の再編成を迫られる時期である。それまで何の疑問もなく受け入れてきた親の価値観に疑問を抱くようになるとともに、自立の意識が高まり、親からの心理的独立を試みるようになる。しかし完全な心理的離乳を達成するまでは、子どもでもおとなでもないという不安定な立場に置かれ、依存と独立という相反する要求のもとで、自己を安定させるために、悩みや考えを語り合える親密な友人関係を求めるようになっていわれている。

青年期には、友人関係はそれまでの遊び仲間から、内的体験の共有や忠誠、親密性を中心とした関係へと変化する。Ausbel, D. P. (1954) は青年期における友人集団のもつ機能に、自尊心の獲得やアイデンティティの形成、心理的離乳の助長などを挙げ、青年期の友人はパーソナリティ形成やアイデンティティ確立のうえで重大な影響力を有する人物であることを指摘している。松井 (1990) はこの時期の友人関係の果たす機能として、安定化の機能、社会的スキルの学習機能、モデル機能の3点を挙げている。すなわち、不安や葛藤などの精神的ストレスの多い青年期にあって、友人と会話や活動を共有することにより心理的安定が図られる、もっとも近い他人としての友人との付き合いを通して、家族との関係では学習できない他者一般との付き合い方の技術である社会的スキルが学習される、さらに友人は自分の知らなかった生き方や考え方を教えてくれるモデルにもなり、新しい世界を広げてくれることになるというものである。このように青年は友人との関係を通じて、自分の個性のあり方を自覚するとともに、自分とは異なる生き方を理解し、評価することを学んでいく (河合, 1983) のである。

青年期の友人関係についての実証的な研究では、岡田 (1987) が自我理想の形成という観点から調査を行い、中学生から高校生にかけての同性の親友像が青年の自己像のモデルになることを見出している。宮下・渡辺 (1992) は大学生を対象に回想法を用いて、中学時代、高校時代、な

らびに現在（大学時代）の友人関係の親密度とアイデンティティの関係を検討し、親密な友人関係が女子の自我同一性との関連で重要であることを示した。安達（1994）は、青年期に父・母・友人・恋人など重要な他者の果たす役割について比較・検討し、葛藤の解決・自己の安定において友人が大きな役割を果たしていることを明らかにした。さらに徳本・北山（1992）は男子大学生を対象にTATを実施し、その反応から、同性・異性の友人関係が自己評価と有意に関連していることを報告している。

これらの結果はいずれも、従来から述べられてきたように、青年期には友人が自己意識の形成に大きな影響を与える“重要な他者”としての役割を担っていくことを裏付けるものといえよう。このことから、親密な友人関係の確立は、青年にとって発達の非常に重要な課題であると考えられる。

2. 依存性について

高橋（1968 a）が「人間に対する関心の向け方を記述する概念であり、『道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求である』依存欲求を充足するためにひきおこされる依存行動のパターンである」と定義した依存性は、人間の乳児が最初を持つ対人的行動パターンである。しかしながら、子どもの能力が生存に不可欠な養護を必要としなくなっても、子どもは他者に依存することをやめるわけではない。高橋は依存性概念について、それまで考えられていた自律性の対極概念という捉え方から離れて、発達に伴って消失するのではなく、変容するものとして捉えた。すなわち、依存から自律への変化を、依存の単なる否定とみるのではなく、依存欲求により生じられる依存行動を年齢、能力、場などにふさわしく発達変容させていく過程と見る立場に立ったのである。人は成長とともに、乳児のように特定少数の対象（主として母親）だけに集中した依存を示すのではなく、複数のいろいろな人物と、いろいろな形で依存関係を結ぶようになる。依存の対象と様式の分化は青年期に最終段階に達し、両親やきょうだい、友人、恋人などがそれぞれ異なった機能を与えられ、分化した位置を占めるとされている。

高橋はこうした立場から、質問紙や文章完成法を用いて系統的な一連の研究を行い、女子青年における依存性の特質を明らかにしている（江口、1966；高橋、1968 a, 1968 b, 1970）。複数の依存対象について、その関わり方を発達や機能の差異といった点から検討した研究では、加藤（1977）の、父、母、友人、教師などの依存対象に「自分」も加え、困った時に誰に頼ろうと思うか順位づけさせ、依存対象の相対的順位の変容を通して独立意識の発達過程を跡付けようとする試みも挙げられる。大学生における性の発達を、依存対象との関係に注目して調査した清水（1979）や、既婚女性を対象に調査を実施し、青年期から成人期にいたる女性の依存性の様相を夫や子どもの出現による依存構造の変化という観点から明らかにした伊藤・北島（1980）の研究もある。

個別の依存対象を取り上げたものとしては、加藤・高木（1980）の、親への心理的な依存性と独立性を自己概念との関連で検討した研究がある。加藤らは「独立性」「親への依存性」「反抗・内的混乱」の3下位尺度からなる独立意識尺度を作成し、独立性や依存性が、自己概念と相関を持つことを明らかにした。また発達の傾向の検討より、女子においては親への依存性が必ずしも障害とはならないことも指摘している。井上（1995）は、大学生を対象に親との依存-独立の葛

藤と自我同一性の関連について調査・検討し、同一性達成地位にある個人は依存欲求と独立欲求がほぼよく保たれているのに対し、同一性地位拡散および権威受容地位にある人は、それぞれ強い独立欲求あるいは依存欲求を持つという結果を得ている。

ところで、友人関係は和田（1996）が指摘するように、親子関係のように一方的な保護や援助の関係ではなく、主として交換やルールに基づく対等の関係である。Newman&Newman（1984）も、友人間の依存―被依存の関係は場面によって逆転し得るものであることを指摘している。中学生から大学生までの友人概念の発達を検討した楠見・狩野（1986）は、大学生は、中学生や高校生とは異なり、相手からの援助を期待するだけでなく、相手も自分を頼りにしてくれるという要素が加わり、双方の価値を認め合う補助的關係を重視することを明らかにした。このように、相互依存というあり方は青年期の友人関係の特徴であると考えられる。前述したように、青年期においては友人が自己意識の形成に重要な役割を果たすことから、友人関係における依存のあり方に注目することは、青年の自己形成という観点からも興味深いものと思われる。しかしながら、このような友人関係に独特な依存のあり方に注目してなされた研究は、これまでのところ見当たらない。そこで本研究では、高橋の基本的立場を踏まえた上で、友人を依存対象として取り上げ、青年期における自己と友人の依存のあり方について、自己の安定性との関連から検討する。

3. 依存性と適応との関連について―「自己の安定性」の観点から―

高橋（1968 a）は依存性と自律性は両極概念ではなく、自律性は依存性の発達・変容を通して獲得されるものであるという立場から、「依存性」を広義に定義し3分類した。第一は、特定の相手とともにいて常に直接的な強化を受けていないと安定し得ず、行動も起こせないような、自己の行動の準拠棒として絶えず他者を必要とする未分化で未熟なあり方である。第二は、依存することへの不安から他者を受け入れず、全ての人に関心を示さないあり方である。第三は、自己の立場から判断、行動でき、自律的であるが、同時に他者にも関心を示し、温かい相互的な関係を享受できるという、成熟した人格に備わっているあり方である。

関（1982）は高橋の考えに基づいて上記の3つのあり方を〈依存欲求〉〈依存の拒否〉〈統合された依存〉として尺度化し、この質問紙を用いて、依存のあり方と、自己像の肯定度によって表される適応との関連について検討した。その結果、統合された依存の高さと適応の良好さに関連が見られることや、依存の拒否の高さと不適応との関連は女子に特有であることなどを報告している。さらに女子の方が依存欲求が高く、男子の方が依存の拒否が高いという性差が見られる原因について、社会的な要因およびそこから派生する教育上の要因から考察し、女子においては他者への依存が社会的に受け入れられているが、男子は幼い頃から人に頼らない態度を身につけさせられており、自分自身意識的にもそうしているため、こうした性差が生じるとしている。

これまでの依存性研究において、依存性は発達とともに消失するのではなく、成熟した人格にも見出されるものであり、他者との良好な対人関係を維持するためにはかえって必要なものとされている。つまり成熟し、うまく適応している人とは、「他者から孤立しているのではなく、他者との信頼関係を保ち、時に応じて相互依存的にもなり、また、そこから得た安定感を基

礎に一個の人格として自律的に行動し得る」(関, 1982) 人であると言える。このことから他者への統合された依存は、自己の安定性にプラスの作用を及ぼすと考えられる。

友人関係のあり方と自己の安定性との関連について、ソーシャルサポートに関する研究は興味深い。友人関係は、ソーシャルサポートに関する研究において重要なサポート源として注目されている。例えば、和田(1992)は大学新生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響を検討し、友人からのサポートが孤独感と関連していることを見出した。福岡・橋本(1995, 1997)も、大学生において友人サポートが精神的健康に対して望ましい効果を持つことを明らかにしている。サポートが得られるような良好な友人関係を持つことと、青年の自己の安定性とは関連があると考えられる。

依存性と自己の安定性の関連を検討する際に、一人でいるとき(単独自己)と友人といるとき(関係自己)の二つの場面を比較することは興味深いと思われる。Winnicott, D. W. (1958, 1963)は、成熟した人は孤立するのではなく、環境と相互依存的なかたちで関係をもつとし、情緒的発達の成熟の指標として“一人でいられる能力”(capacity to be alone)を挙げている。そのような能力は人生早期において、「誰かと一緒にいて、しかも一人でいる」体験、すなわち「未熟な自我が、母親に自我を支えてもらうことによって自然と均衡を得る」体験をもったことを基盤として形成されるという。他者に全面的に頼らなければ生きていけない時期に、絶対的依存を受け入れられるという経験をもつことによって、自我支持的な母親を取り入れ、それを頼りに一種の安定感を得る。安定感の内在化は他者との信頼関係を保つことを可能にするとともに、自己確実感をもって主体的に生きることをも可能にし、関(1982)はこのような過程が依存性の統合の基礎にあるという考えを述べている。統合された依存が高い人は、友人が依存対象として内在化、象徴化された存在となり得ていると考えられるため、自己の安定性については、友人が側にいるかどうかという場面の影響は受けないと考えられる。しかし、依存欲求が高い人は自他が未分化であり常に他者を必要とするため、友人がいない場面では不安定になりやすいと考えられる。依存の拒否は、根底に依存不安があると考えられ、他者との関わりも希薄なあり方である。関(1982)においても、女子は依存の拒否と不適応との関連が見出されていることから、依存の拒否が高い人は、場面に関わらず不安定さが高いと考えられる。

以上をふまえて、本研究では「友人」を依存対象として取り上げ、青年期における自己と友人の依存のあり方について、自己の安定性との関連から検討、考察する。その際、一人でいるとき(単独自己)と友人といるとき(関係自己)の二つの場面を比較することによって、現実的な友人の存在が安定性に及ぼす影響についても検討する。なお、青年の自己意識形成に影響を与えるのは一般的に同性の友人であることや、異性友人関係は恋愛関係との差異を見出だすのが困難である(和田, 1993) ことなどから、本研究では同性友人関係のみを取り上げる。

目 的

青年の友人への依存のあり方を依存性尺度によって、性差に注目しながら調査、検討する。また自己安定性尺度を用い、友人への依存のあり方と適応との関連についても検討する。

仮説は以下の通りである。

- 仮説 1 依存欲求の高い人ほど、単独自己の安定性は低く、関係自己の安定性は高いだろう。
 仮説 2 依存の拒否の高い人ほど、自己の安定性が低いだろう。
 仮説 3 統合された依存が高いほど、自己の安定性が高いだろう。

方 法

1) 被検者

大学生男子 72 名 (18-28 歳, 平均年齢 21.4 歳, SD 2.12), 女子 241 名 (18-26 歳, 平均年齢 20.6 歳, SD 1.45), 大学名, 大学別の人数, 年齢は Table 1 に示すとおりである。

Table 1 大学別人数と年齢

	大 学 名	人数	平均年齢	SD	range
男子	国立 A 大学	72	21.4	2.12	18-28
女子	国立 A 大学	68	20.6	1.46	18-26
	私立 B 女子大学	30	19.8	0.61	19-21
	私立 C 女子大学	143	20.4	1.15	18-23

2) 調査内容

以下の調査内容を一連の質問紙として作成し, 配布した。

a) 依存性尺度: 関 (1982) の依存性の自己評定質問紙を, 依存対象が同性で同年代の友人に限定されるように筆者が改めて, 作成した。「依存欲求」「統合された依存」「依存の拒否」の 3 つの下位尺度 (それぞれ 13 項目) からなる 39 項目の質問紙で, 「全然あてはまらない (+1)」から「非常によくあてはまる (+5)」までの 5 段階評定とした。(Table 2 を参照)

b) 自己安定性尺度: 村瀬・村瀬 (1966) の自己像尺度より, 自己の安定性を表すと思われる 6 形容詞対を選択し (Table 3 を参照), 単独自己 (一人でいるときの自分) と関係自己 (友人といるときの自分) のそれぞれにおいて, どの程度当てはまると思うか 7 段階で評定を求めた。

3) 手続き

私立 B 女子大学では講義時間を利用し, 筆者が教示をして集団で行い, その場で回収した。所要時間は約 20 分であった。国立 A 大学, 私立 C 女子大学では個別に質問紙を配布, 回収した。

結 果

【結果の整理】

1) 依存性尺度の因子分析

性別, 大学別にそれぞれ主成分分析を行ったところ, ほぼ共通する因子構造を得たため, 改めて全大学, 男女をまとめた因子分析 (主成分分解, varimax 回転) を行い, 因子寄与率を考慮して 3 因子を抽出した。負荷量が 0.4 に満たない項目および複数の因子に高い負荷量を示す項目を除き, 再度因子分析を行った。結果を Table 2 に示す。累積寄与率は 49.1% であった。第 I 因

子、第Ⅱ因子、第Ⅲ因子はそれぞれ「依存の拒否」尺度、「依存欲求」尺度、「統合された依存」尺度の項目に負荷が高かった。ただし、「うれしいこと、楽しいことは、まず友人に報告したい」という項目は、関（1982）では「依存欲求」尺度に含まれる項目であったが、第Ⅲ因子の負荷が高かった。項目の内容を吟味すると、自律性と相互性を前提としている点で、単に共に在ることや一方的に物理的・精神的援助を求める「依存欲求」よりも、成熟したあり方であると考えられることから、本研究ではこの項目を「統合された依存」尺度に含めることとした。以上のことをふまえて、基本的には関（1982）にならい、以上の3因子を第Ⅰ因子「依存の拒否」（以下「拒否」）、第Ⅱ因子「依存欲求」（以下「依存」）、第Ⅲ因子「統合された依存」（以下「統合」）と命名した。

2) 自己安定性尺度の因子分析

得点が高くなるほど高い安定性を示すように1点～7点を与えた。単独自己（以下〈単独〉）、関係自己（以下〈関係〉）の各場面において性別、大学別の主成分分析を行ったところ、ほぼ共通する因子構造を得た。そこで場面、男女、大学をまとめて因子分析を行ったところ、全ての項目について第Ⅰ主成分における高い負荷量を得、尺度の一次元性が確認された（Table 3）。

Table 2 依存性尺度の因子分析結果（varimax 回転後）

Item	Factor I	Factor II	Factor III	α
16 友人に頼る立場になると、どうも落ち着かない。	.764	-.074	-.146	
30 安心して友人の世話になれないほうだ。	.738	-.114	-.283	
33 友人に頼み事をするのは、どんなときでも、非常な決心がいる。	.725	.064	-.110	
14 自分のために、友人に何かをやってもらうのは苦手だ。	.721	-.110	-.132	
17 友人には、絶対に借りをつくりたくない。	.702	-.036	-.181	
23 恩返しできないなら、友人に援助を求めるのは、ためらわれる。	.695	.102	-.084	
13 友人の世話になるのは、恥ずかしいと思う。	.692	-.068	-.195	
26 自分のことは、どんなことがあっても、自分一人でしないと気がすまない。	.649	-.319	.000	
10 どんなに困ったときでも、友人に頼らないほうだ。	.614	-.393	-.222	
22 親しい間柄の友人にでも、甘えることのない方だ。	.585	-.382	-.158	.896
28 何かするときには、友人に気を配って、はげましてもらいたい。	-.099	.723	.126	
18 何かにつけて、友人に味方になってもらいたい。	.073	.665	.055	
38 何か迷っているときには、友人に「これでいい?」と聞きたい。	-.268	.646	-.030	
35 病気のときや、憂うつなときには、友人に同情してもらいたい。	.031	.634	.070	
21 できることならいつも、友人と一緒にいたい。	-.009	.613	.165	
11 一人で決心がつきかねるときには、友人の意見に従いたい。	-.251	.606	-.090	
6 できることなら、どこへ行くにも、友人と一緒に行きたい。	-.036	.604	.125	
25 困っているときや悲しいときには、友人に気持ちを分かってもらいたい。	-.146	.598	.227	
1 友人から「元気?」などと気を配ってもらいたい。	.031	.579	.067	
5 わずかしい仕事をするときには、できたら、友人と一緒にしたい。	-.316	.575	-.132	
31 重要な決心をするときにはいつも、友人の意見が聞きたい。	-.150	.565	.260	
32 悪い知らせ、悲しい知らせなどを受け取る場合には、友人と一緒にいてもらいたい。	-.025	.512	.064	.858
36 心のささえになってくれる友人がいる。	-.158	.026	.840	
15 自分の信頼できる友人がいるので安心だ。	-.238	-.003	.769	
12 わたしがしようとするのを、何かにつけ理解してくれる、と思う友人がいる。	-.139	.041	.741	
20 思い出すだけで、心が安らくなるような友人がいる。	-.036	.058	.715	
29 自分を見守ってくれるように思う友人がいるので、大事な場面も切りぬけられる。	-.130	.286	.688	
39 あのになら少々無理を言ってもいい、と思う友人がいる。	-.280	-.008	.573	
4 友人のことを思い浮かべて、元気を出すことがある。	-.128	.287	.540	
34 うれしいこと、楽しいことは、まず友人に報告したい。	-.140	.330	.489	.852
固有値	8.28	3.69	2.77	
累積寄与率(%)	27.6	39.9	49.1	

Table 3 自己安定性尺度の因子分析結果

Item	Factor I	α
2 安心しているーおびえている*	.825	
4 のびやかなー萎縮した*	.818	
1 心の開いたー心の閉じた*	.732	
3 生気のないー生気のある	-.681	
5 束縛されたー自由な	-.716	
6 弱々しいー力強い	-.741	.843
固有値	3.41	
累積寄与率 (%)	56.8	

* 逆転項目

【各尺度および尺度間の関連の検討】

男女比を考慮し、被検者のうち国立 A 大学学生 140 名（男子 72 名、女子 68 名）を対象として分析を行った。

a) 依存性尺度

依存性尺度の「依存」、「拒否」、「統合」それぞれの得点を個人毎に算出した。全体および性別の平均得点を Figure 1 に示す。

t 検定の結果、「依存」得点については性差が見られなかった。「拒否」得点は男子が、「統合」得点は女子が有意に高かった（それぞれ $t = 3.20$, $t = 3.63$, いずれも $p < .01$ ）。尺度間のピアソンの積率相関係数を全体および男女別に算出したところ（Table 4），すべてで「依存」と「統合」の間に正の、「統合」と「拒否」の間に負の相関が見られたが、女子は男子に比べて相関が弱かった。また女子は「依存」と「拒否」の負の相関が見られなかった。

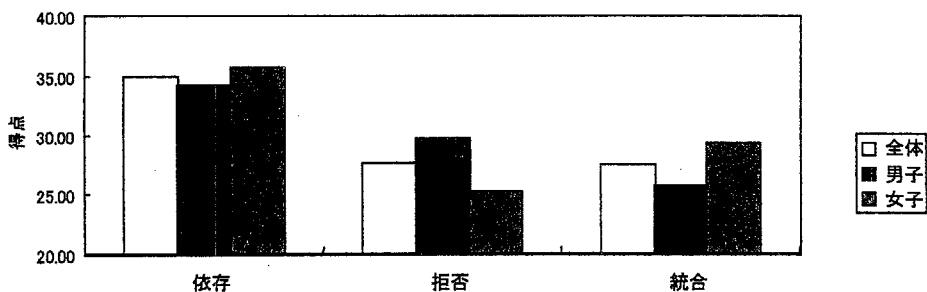


Figure 1 依存性尺度別平均得点

Table 4 依存性尺度間の相関

	全体	男子	女子
依存ー統合	.36 **	.41 **	.24 *
統合ー拒否	-.50 **	-.55 **	-.29 *
依存ー拒否	-.37 **	-.46 **	-.25

* $p < .05$, ** $p < .01$

b) 自己安定性尺度

自己安定性尺度の得点について場面2（単独，関係）×性別2（男女）の2要因分散分析を行った（Figure 2）。その結果，性別の主効果と場面の主効果が有意であり，男子よりも女子，〈単独〉よりも〈関係〉の得点が高かった（それぞれ $F = 4.87$, $p < .05$, $F = 104.14$, $p < .01$ ）。交互作用は見られなかった。

依存性尺度得点との間でピアソンの積率相関係数を算出したところ（Table 5），「統合」と〈単独〉〈関係〉それぞれの場面との間に正の相関，「拒否」と〈単独〉の間に負の相関があった。また男子では「拒否」と〈関係〉の負の相関が見られなかった。女子は「依存」と〈単独〉に正の相関があった。したがって仮説2の一部と仮説3は支持されたが，仮説1は支持されなかった。

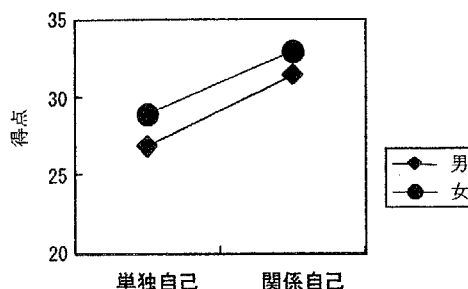


Figure 2 自己安定性尺度得点

Table 5 依存性尺度と自己安定性

	単 独			関 係		
	全体	男子	女子	全体	男子	女子
依存	.12	.01	.26 *	.04	-.02	.12
拒否	-.31 **	-.25 *	-.34 **	-.29 **	-.22	-.34 **
統合	.35 **	.23 *	.44 **	.42 **	.39 **	.40 **

* $p < .05$, ** $p < .01$

考 察

1. 依存性尺度の得点について

「拒否」は男子が，「統合」は女子が有意に高かった。これは関（1982）と一致する結果であった。これらの性差が生じたことについては，従来から指摘されているような社会的背景をもつ性役割観が影響していると考えられる。すなわち男子は幼い頃から人に頼らない態度を身につけさせられ，そうした態度を内在化しているのに対し，女子は男子よりも温かさや親密感を強調して育てられるため，より友人への関心を示し，温かい相互的な関係を築くのだと考えられる。ただし「統合」が女子よりも低いという結果のみから，男子は依存のあり方が未熟で自律性が低いと結論づけることは避けるべきであろう。前述のように，男子は女子に比べて，人に頼らないという行動期待を内在化しているために，依存性の存在そのものを意識しにくい，または認めにくいと考えられ，質問紙という本調査の方法の限界から，依存性の存在が回答に十分に反映されなかったという可能性があるからである。

また，男女で友人との付き合い方が異なることは従来からしばしば指摘されている。和田

(1993)によると、男性友人関係は手段的であり、同じことをするのが好きな人を友人として求めるのに対し、女性友人関係は情緒的であり、相互依存と自己開示をより友人に望むという。長沼・落合(1998)は、青年期の友人関係の特徴として、女子は同性の友人と被愛願望が背景にあるような付き合い方や、互いの個別性についての自覚が薄いベッタリとくっついた関係をもち、一方男子には、女子に見られるこうした付き合い方はほとんど見られず、逆に友人に頼らず、自分の内面も出さないような心理的に離れた関係をもつとしている。このように男女で友人の位置づけ方が異なり、相手に求めるものの質や関係のもち方に違いがあることも、性差が見られた要因の一つと考えられる。

「依存」については、先行研究と異なり本研究では性差が見られなかった。青年期の女子においては、愛情の対象(恋人)を持つことによって依存欲求が増大する(高橋, 1968)という知見がある。依存対象を「不特定」としていた先行研究には含まれていたと考えられる「恋人」が、本研究では含まれていなかったため、女子の依存欲求がそれほど高くならなかった可能性がある。また調査時期の違いから、社会的背景の変化により、青年の依存のあり方そのものが変容している可能性も指摘する必要があるだろう。

2. 依存性尺度間の相関

全体、男子および女子で「依存-統合」間に正の、「統合-拒否」間に負の相関が見られたが、女子の相関は男子に比べて弱かった。「統合」と「拒否」は依存性的か否かという点で対立する概念であり、妥当な結果であると言える。しかし「依存」と「統合」はともに依存性的ではあるが、質的に異なる概念であり、両者の間に相関関係が見られたということは、「依存」と「統合」が、特に男子においてそれほど明確に分化していないことを示唆している。

また全体と男子における「依存-拒否」の負の相関は「統合-拒否」同様、依存性的か否かという点で両者が区別された結果と考えられる。一方女子では「依存-拒否」の相関が見られなかった。女子は「依存」と「拒否」を互いに独立したものとしてとらえる傾向があり、両者は必ずしも対立するものではないのかもしれない。女子は依存することを社会的に受け入れられているという、社会的性役割観の影響も含めて、今後さらなる検討が必要であろう。

3. 自己安定性尺度と依存性尺度の関連

自己安定性尺度においては、〈単独〉よりも〈関係〉の得点が高かった。これは友人が現実に関わることが可能な存在としてあることが、青年期において自己の安定に重要な役割を果たすことを裏づける結果と言える。女子の方が得点が高かったことについての検討は必ずしも本研究の目的ではないが、「統合」が高かったことも考慮すると、友人を象徴的な依存対象として内在化する程度が高いことが自己の安定化につながる要因の一つとして考えられるであろう。

男女とも「統合」と〈単独〉〈関係〉のそれぞれの場面の安定性との間に正の相関が見られたことから、象徴化された形で心の支えとなる友人を持つことが、性別・場面を問わず、自己の安定性に関わっていることが示され、仮説3が支持された。また女子は「拒否」と〈単独〉〈関係〉両場面の間に負の相関が見られたが、男子は「拒否」と〈単独〉の間に弱い負の相関が見られたのみであり、女子は潜在的に依存不安があるとされる「拒否」と自己の安定性の間に関連があるが、

男子においては必ずしもそうではないと言える。したがって、仮説2は女子においてのみ支持された。男子においては「拒否」の持つ意味が、女子ほど否定的ではないためであろう。「拒否」には発達の否定的な面ばかりではなく、自律への試みとしての肯定的な面もあるのかもしれない。この点についての検討は今後の課題である。

「依存」は全体および男子では相関がなく、依存欲求を有することは自己の安定性には特に肯定的な意味も、否定的な意味も持たないことを示唆する結果となった。女子においては〈単独〉との間に弱い正の相関が見られ、依存欲求を持つことはむしろ肯定的な意味を持つ可能性が示唆された。また場面間で安定性との関連の仕方が異なることが予想されたが、そのような傾向は見られず、仮説1は支持されなかった。これについては、いくつかの要因が考えられるだろう。まず、友人が唯一の依存対象ではなく複数の対象に分化した依存をする場合、友人と一緒にいるか否か自体はそれほど大きな影響を持たないという可能性である。また本研究で測定された「依存」は欲求レベルであって、現実的な状態を問うものではなかった。したがって依存欲求の高さがそのまま依存行動を意味するわけではなく、むしろ自らの依存欲求を自覚しているという意味においては、成熟したあり方であるとも考えられる。「依存-統合」に正の相関が見られたことから、依存欲求を持つことがすなわち未熟な依存のあり方であるとは必ずしも言えない面があり、依存欲求を持つことの意味については、さらなる検討が必要である。

4. ま と め

本研究から、友人への依存のあり方と適応の指標である自己の安定性との関連が明らかにされた。また依存のあり方や依存性の持つ意味は男女で異なっていることが示唆された。

かつて青年期の友人関係は「心の友」と呼ばれ、人格的影響を及ぼし合うものであるとされてきた(井上, 1966)が、最近の青年の友人関係については、「あまり関わらない」、「適当に仲よく」、「深く踏み込まないし、踏み込ませない」(宮下・渡辺, 1992)といった関係の希薄化が指摘されている。岡田(1995)も、互いに傷つけあわぬように気を遣う・互いの領域に踏み込まぬよう、関係の深まりを回避する・楽しさを追求し群れる、といった3側面を、大学生の友人関係の特徴として見出している。

しかしながら、本研究でとらえられた青年と友人の依存のあり方からは、温かく信頼できる親密な友人関係を持つことは、現代の青年にとってもやはり重要なことであることがうかがわれた。近年、女性の社会進出はますます進み、自律性を持つことがむしろ奨励されるようになっていく。青年を取り巻く環境は年々変化し、一方で、「頼りたくても頼れない」「頼り方が分からない」といった社会的スキルの未熟さや、社会的期待と内的な欲求とのジレンマなどの問題も起こってきている。青年の自己形成に関わる依存性の問題は、こうした観点も含めて、今後さらに詳細な調査や検討が必要なテーマであると思われる。

引 用 文 献

- 安達喜美子 1994 青年期における意味ある他者の研究—とくに、異性の友人(恋人)の意味を中心として— 青年心理学研究, 6, 19-27.
Ausbel, D.P. 1954 Theory and Problems of Adolescent Development. Grune and Stratton.

- 江口恵子 1966 依存性の研究 教育心理学研究, 14, 45-58.
- 福岡欣治・橋本幸 1995 大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係 教育心理学研究, 43, 185-193.
- 福岡欣治・橋本幸 1997 大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果 心理学研究, 68, 403-409.
- 井上健治 1966 青年と人間関係—(1) 友人関係— 澤田慶輔(編) 青年心理学 東京大学出版会 pp. 195-224.
- 井上忠典 1995 大学生における親との依存—独立の葛藤と自我同一性の関連について 筑波大学心理学研究, 17, 163-173.
- 伊藤裕子・北島順子 1980 既婚女性における依存性 教育心理学研究, 28, 319-323.
- 加藤隆勝 1977 青年期における自己意識の構造(心理学モノグラフ, 14) 東京大学出版会.
- 加藤隆勝・高木秀明 1980 青年期における独立意識の発達と自己概念との関係 教育心理学研究, 28, 336-340.
- 河合隼雄 1983 大人になることのむずかしさ—青年期の問題— 岩波書店.
- 楠見幸子・狩野素朗 1986 青年期における友人概念発達の因子分析的研究 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 31, 231-238.
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 青年期における友人関係 齊藤耕二・菊池章夫(編著) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店 pp. 283-296.
- 宮下一博・渡辺朝子 1993 青年期における自我同一性と友人関係 千葉大学教育学部研究紀要, 40, 107-111.
- 村瀬孝雄・村瀬嘉代子 1966 自己像尺度作成の試み 1966年度版臨床心理学の進歩 日本臨床心理学会編.
- 長沼恭子・落合良行 1998 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 青年心理学研究, 10, 35-47.
- Newman, B. M. & Newman, P. R. 1984 Development through life, 3rd ed. Dorsey. (福島護訳 1988 生涯発達心理学—エリクソンによる人間の一生とその可能性 川島書店.)
- 岡田 努 1987 青年期男子の自我理想とその形成過程 教育心理学研究, 35, 116-121.
- 岡田 努 1995 現代大学生の友人関係と自己像・友人像に関する考察 教育心理学研究, 43, 354-363.
- 関知恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究—自己像との関連において— 京都大学教育学部心理教育相談室 臨床心理事例研究, 9, 230-249.
- 清水弘司 1979 大学生における性の発達と依存対象について 心理学研究, 50, 265-272.
- 高橋恵子 1968 a 依存性の発達の研究Ⅰ—大学生女子の依存性— 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 高橋恵子 1968 b 依存性の発達の研究Ⅱ—大学生との比較における高校生女子の依存性— 教育心理学研究, 16, 216-226.
- 高橋恵子 1970 依存性の発達の研究Ⅲ—大学生・高校生との比較における中学生女子の依存性— 教育心理学研究, 18, 65-75.
- 徳本祥・北山修 1992 重要な他者による受容と自己評価との関連—親子関係を主として— 九州大学教育学部紀要(教育心理学部門), 37, 73-82.
- 和田実 1992 大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響 教育心理学研究, 40, 386-393.
- 和田実 1993 同性友人関係: その性および性役割タイプによる差異 社会心理学研究, 8, 67-75.
- 和田実 1996 同性への友人関係期待と年齢・性・性役割同一性との関連 心理学研究, 67, 232-237.
- Winnicott, D. W. 1965 The maturational processes and the facilitating environment. London: Hogarth Press. (牛島定信訳 1977 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社)

付 記

本論文は、京都大学教育学部に提出した 1996 年度卒業論文の一部に加筆，修正したものである。論文作成にあたりご指導頂いた，現甲子園大学齋藤久美子教授，京都大学桑原知子助教授に謝意を表します。また調査に協力して下さった多くの方々に心よりお礼申し上げます。

（博士後期課程 2 回生，心理臨床学講座）